

## I. 職員の報告

### (1) 公民館事業の体系 (公民館長 石田進)

公民館の重要な業務は主催事業と言われています。これがなければ単なる集会施設となってしまう。主催事業が単なる趣味や語学、教養だけの講座であれば、カルチャーセンターと何ら変わりがありません。市民の税金を投入するからには、その目的が公民館の事業目的に合致されなければならないと考えています。公民館は要らないなどといった誤った認識を生み出さないためにも、公民館事業の意義を認識していただきたいと思います。

最初に、法律の体系から公民館を説明します。

公民館とは、教育基本法の第4条において「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない(以下省略)」と教育の機会均等をうたっており、その方策の一つとして、同法第12条で「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育」と社会教育の取り組みを示し、「国及び地方公共団体によって奨励されなければならない」と国や市町村が社会教育の振興に努めることが言及されています。国立市公民館も教育機関の一つで、社会教育施設ですのでこの条文が適用されます。

さらに、社会教育法の20条には公民館の目的が明記され「住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与する」と示されています。

これらから、公民館は他の集会施設や民間カルチャーセンターと大きく異なり、教育基本法や社会教育法などの日本の教育法体系に明確に位置づけられていることが明らかです。

私たち職員は、これらの教育関係の法律や公民館の誕生からの経緯、文教地区国立で培ってきた誇りなどを勘案して、ここ数年、公民館の主催事業を5つの目的別カテゴリーに分けて、市民の自主的な学習を通じた住民自治の向上や地域とのつながりが達成できるように働きかけてきました。ここでその体系としての5本の柱立てとその意義をお伝えします〔資料B参照〕。

1つ目の柱は、「現代社会の課題を考える」です。ここでは人権や平和、憲法など、社会に共通する普遍的な課題、また政治や経済、国際関係など、時事的な社会問題並びに高度で多様化した現代社会が抱えるさまざまな課題からテーマを決めて、講座を企画しています。住民一人一人が自立し、主体的に活動し、住民自治の人格を形成するための柱立てとしています。憲法、人権、平和、環境などは、実際に行ってきた講座名です。

2つ目の柱は、「共生の地域社会を育む」です。ここでは障害のある方や外国にルーツのある方、女性や子ども、高齢の方など社会的弱者、いわゆるマイノリティーと言われる方々などをテーマにした講座、あるいは男女の性の別、親と子、高齢の方など対象を限定した講座を企画しております。だれもが地域において1人の人間として当たり前暮らししていける共生の社会づくりを育む柱立てとしています。

3つ目の柱は、「まちを知る、地域から学ぶ」です。国立というまちならではの地域に特

化したテーマで、例えば一橋大学や大学通りのまちづくりの地域史や南部地域など自然豊かな地域を扱った講座、あるいは地域での暮らし、防災など、生活に密着した課題、講座を企画しています。ここでは住民が自ら暮らす地域の成り立ちや現状を知り、地域への愛着などを高め、魅力ある地域社会を構築する柱立てとしています。

4つ目の柱は、「社会をみつめ、文化をつくる」です。人文科学や社会科学に関わる文学や哲学、心理学などの講座を中心に、文化を学ぶ講座なども企画しております。創造力を養い、論理的な思考を身につけ、私たち人間が生み出してきたさまざまな事柄を学び、考えるための柱立てとしています。

5つ目の柱は、「表現と創作を楽しむ」です。広く市民の創造や表現、芸術活動などを取り上げた講座を企画しています。体や五感を生かして豊かな感性と感覚をともに育み、楽しむこと、また創作、芸術を通じた交流などを図る柱立てとしています。

このように、大きく目的別に5つのカテゴリーに分け、事業の意義をお伝えしてきました。事業ごとに複数の担当職員が自ら目的に沿った講座を立案し、学習内容を吟味し、時には学習の展開を修正しながら、最終的には住民の自主的な学習、および学びを通じた地域のつながりなどに結びつけることを図っています。さらに、地域社会における波及効果などを大いに期待しています。

### 【資料B】5本の柱立て

<p>1 現代社会の課題を考える 普遍的な課題・時事的な社会問題をテーマとした事業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●憲法</li> <li>●人権</li> <li>●平和</li> <li>●環境</li> <li>●教育</li> <li>●多文化共生</li> <li>●家族</li> <li>●格差と貧困</li> </ul>	<p>2 共生の地域社会を育む 課題別および対象者別事業</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●女性のライフデザイン</li> <li>●母と娘のむずかしさ</li> <li>●男性の料理教室</li> <li>●親子で遊ぼう考えよう</li> <li>●<b>世代間交流</b></li> <li>●中高生のための学習支援</li> <li>●青年室講座</li> <li>●青年室活動(コーヒーハウス)</li> <li>●シルバー学習会</li> </ul> </td> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ワークライフバランス</li> <li>●<b>老いとケア</b></li> <li>●しょうがいしゃ青年教室</li> <li>●しょうがいしゃパソコン教室</li> <li>●パラスポーツ</li> <li>●生活のための日本語講座</li> <li>●日本語教育入門</li> <li>●にほんごサロン</li> </ul> </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●女性のライフデザイン</li> <li>●母と娘のむずかしさ</li> <li>●男性の料理教室</li> <li>●親子で遊ぼう考えよう</li> <li>●<b>世代間交流</b></li> <li>●中高生のための学習支援</li> <li>●青年室講座</li> <li>●青年室活動(コーヒーハウス)</li> <li>●シルバー学習会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ワークライフバランス</li> <li>●<b>老いとケア</b></li> <li>●しょうがいしゃ青年教室</li> <li>●しょうがいしゃパソコン教室</li> <li>●パラスポーツ</li> <li>●生活のための日本語講座</li> <li>●日本語教育入門</li> <li>●にほんごサロン</li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>●女性のライフデザイン</li> <li>●母と娘のむずかしさ</li> <li>●男性の料理教室</li> <li>●親子で遊ぼう考えよう</li> <li>●<b>世代間交流</b></li> <li>●中高生のための学習支援</li> <li>●青年室講座</li> <li>●青年室活動(コーヒーハウス)</li> <li>●シルバー学習会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ワークライフバランス</li> <li>●<b>老いとケア</b></li> <li>●しょうがいしゃ青年教室</li> <li>●しょうがいしゃパソコン教室</li> <li>●パラスポーツ</li> <li>●生活のための日本語講座</li> <li>●日本語教育入門</li> <li>●にほんごサロン</li> </ul>				
<p>3 まちを知る、地域から学ぶ くにたち地域に特化した事業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自然</li> <li>●緑化活動</li> <li>●地域史</li> <li>●一橋大学院生講座</li> <li>●一橋大学連携講座</li> <li>●学びのデザイン</li> <li>●社会教育学習会</li> <li>●公民館利用者交流会</li> <li>●地域防災</li> <li>●<b>市制施行 50 周年記念事業</b></li> </ul>	<p>4 社会をみつめ、文化をつくる 人文・社会科学を中心とした事業</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>くにたちブッククラブ</b></li> <li>●古典を読む</li> <li>●哲学</li> <li>●図書室のつどい</li> <li>●作家と作品</li> </ul> </td> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ヒトの心を探る</li> <li>●映画会</li> <li>●シネマトーク</li> <li>●文化</li> <li>●文学から見る社会</li> </ul> </td> </tr> </table> <p>5 表現と創作を楽しむ 創作や表現、芸術活動などの事業</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●朗読</li> <li>●身体表現</li> <li>●陶芸</li> </ul> </td> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>●銅版画</li> <li>●市民文化祭</li> </ul> </td> </tr> </table>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>くにたちブッククラブ</b></li> <li>●古典を読む</li> <li>●哲学</li> <li>●図書室のつどい</li> <li>●作家と作品</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ヒトの心を探る</li> <li>●映画会</li> <li>●シネマトーク</li> <li>●文化</li> <li>●文学から見る社会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●朗読</li> <li>●身体表現</li> <li>●陶芸</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●銅版画</li> <li>●市民文化祭</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>くにたちブッククラブ</b></li> <li>●古典を読む</li> <li>●哲学</li> <li>●図書室のつどい</li> <li>●作家と作品</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ヒトの心を探る</li> <li>●映画会</li> <li>●シネマトーク</li> <li>●文化</li> <li>●文学から見る社会</li> </ul>				
<ul style="list-style-type: none"> <li>●朗読</li> <li>●身体表現</li> <li>●陶芸</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●銅版画</li> <li>●市民文化祭</li> </ul>				

<p style="text-align: right;">2018年1月7日(日) みんなで話そう公民館講座—市民と職員で「学び」をふりかえる会—</p> <p style="text-align: center;">文学講座 「くにたちブッククラブ」 〈テーブルA〉</p> <p style="text-align: right;">担当：中根 久美子 1</p>	
<p style="text-align: center;"><b>①公民館事業全体の中の位置づけ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 「公民館事業5つの柱」では、 ④社会をみつめ、文化をつくる、に位置付けられている。</li> <li>◆ この位置づけの中では他に、「古典を読む」「哲学」「図書室のつどい」「作家と作品」「ヒトの心を探る」「映画会・映画会の話」がある。</li> </ul> <p style="text-align: right;">2</p>	<p>公民館事業全体の中の位置づけとしては、4番の「社会をみつめ、文化をつくる」という位置づけになっています。この位置づけの中には「古典を読む」「哲学」「図書室のつどい」、あと「作家と作品」などの講座が含まれています。</p>
<p style="text-align: center;"><b>②なぜ、この講座を行ったのか？ (目的・経緯)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆ この講座では、共同で一つの作品について互いに読みを深めることで、自らの読書力と心の豊かさを養うこと、性別や世代、社会的背景を超えて集うことで楽しめる時間、共有できる考えなどに接し、文学を深めることを目的としている。</li> <li>◆ 国立市公民館の図書室事業として、1977年に「読後感を語るつどい」として始まり、1990年に「文学講座」、2009年に「くにたちブッククラブ」と名称を変えながら継続されてきた。</li> </ul> <p style="text-align: right;">3</p>	<p>なぜこの講座を行ったのか。この講座では共同で1つの作品についてお互いに読みを深めることで、みずからの読書力と心の豊かさを養うこと、性別や世代、社会的背景を超えて集うことで、楽しめる時間、共有できる考えなどに接し、文学を深めることを目的としているということで始めています。</p> <p>図書室事業として1977年に「読後感を語るつどい」として始まり、1990年に「文学講座」、2009年に「くにたちブッククラブ」と名称を変えながら今に続いています。始めてからことして40年になる長い文学講座になっています。</p>

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

#### 【1年の流れ】

- ◆ 毎年5月から翌年1月まで（8月を除く）毎月1回、年8回実施。原則第2木曜日 PM7:30～9:30
- ◆ 通年の連続講座として募集しているが、年度途中からの参加や一回のみの参加も可能。
- ◆ 1月に今年度の振り返り会。
- ◆ 2月に次年度課題図書を選定。
- ◆ 2月から3月にかけて文集づくり。
- ◆ くにたちブッククラブでは、課題図書を選定や、文集作りをはじめ、講義の進め方、発言の仕方など、講座参加者と考えながら運営している。

4

ブッククラブの1年の流れですが、ブッククラブは毎年公民館だよりやホームページなどで皆さんに募集をかけています。毎年5月から翌年1月まで、8月を除く毎月1回、年8回実施しています。原則、第2木曜日の夜7時半から9時半という2時間の枠の中で行なっています。始まりの時間が少し遅いのですが、これは働いている方もできるだけ参加してほしいということで、ちょっと遅めの時間からの始まりとなっています。

通年の連続講座として募集はしていますが、年度途中からの参加や1回のみの参加も受け付けています。

1月はブッククラブ8回のうち最後の月になるので、それが終わった後、参加できる方を募り、1年間を振り返る会を設けて、皆さんと意見のやりとりをしています。

2月に次年度の課題図書を選定ということで、次年度の8作品をこのときに決めますが、これも参加者有志と、講座参加者全員が参加できるわけではないので、アンケートをあらかじめとり、意見を集めた上で話し合いをして決めています。

2月から3月にかけて、1年間ブッククラブを通して読んだ本について皆さんに書いていただいて、文集づくりをします。

くにたちブッククラブでは課題図書を選定や文集づくり、講義の進め方、発言の仕方など、講座参加者と話し合いをしながら運営しています。これは1月の振り返り会、2月の課題図書のときにいろいろ意見交換をして決めています。

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

#### 【講座の様子】

- ◆ 講師を中心に、なるべくお互いが見えるようにコの字型で座っています。毎回23人くらい参加しています。



5

次に、講座の様子ですが、講師を中心になるべくお互いの顔が見えるように、コの字型に座って行っています。初回は多いのですが、1年間平均すると22、23人ぐらいの参加になっています。初回は、課題図書を選定するときに講師の方にもご協力いただいて選定していますが、これから始まる8作品について本の説明をしていただいた後、1回目の作品に入るという形になっているので、参加者の方は初回が一番多いです。初回は、昨年では27人ぐらい参加しています。初回なので、これらの8作品について参加者の方がどんな反応をするか、毎年、1回目はどきどきしながら開催しています。

最初のご案内として、講師の話を聞くだけではなくて、自分の感想を発表し、ほかの参加者の感想も聞いて、最後に感想文まで書いてみんなで文集をつくり上げるところまで参加できれば、さらに作品に対する読みも深くなるのではないかとということで、皆さんに初回のときに文集づくりまでのご案内をしています。

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

#### 【講座の進め方】

- ・参加者はあらかじめ、課題図書を読んでから参加。
- ・前半1時間は、課題図書について参加者から、感想を1人2～3分以内で発表してもらう。（パスもあり）
- ・後半1時間は講師から解説を聞き、解説の間や最後に質問や意見のやり取りをしている。
- ・各会の講座終了後、参加者1名に公民館図書室発行の「図書室月報」の「ブッククラブから」のコーナーに感想文を寄せてもらう。

6

講座の進め方ですが、一応参加者の方にはあらかじめ課題図書を読んできてもらっての参加をお願いしています。2時間のうちの前半1時間は、本について参加者から感想の発表をしてもらうのですが、1人2分から3分以内でおさめるようにお願いはしているけれども、熱がこもってくると3分では終わらず、なかなかお話をとめられないときもあつたりします。司会者としてはお話を遮れないところがあつて、難しいところです。一応1人2、3分ということだと、毎回20人ぐらいは来るので、ほぼ1時間は皆さんの発表で時間が終わってしまいます。そうすると、後半1時間は講師の解説ということで、なるべく講師のお話もきっちり聞きたいと思っていらっしゃる方も多いので、感想が長くなる方については司会者としてとめられない部分がありますが、そこは参加者の方にとめていただいたりとか、助けられながらこの会を運営しているような状況です。

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

【次年度の課題図書選定について】

- ◎ 次年度の課題図書8作品は、参加者有志、職員、講師で相談して決めている。
- ・ 次年度に取り上げたい本と、今年度を振り返っての意見・提言などのアンケートをとり、1月下旬に参加者有志と職員による、振り返りと次年度課題図書の候補作について話し合いをしている。（参加者：10人前後）
- ・ 文庫であること、あまり長い作品は避ける。
- ・ 2月、選定に協力してくれる講師に来ていただき、アンケートや1月下旬に話し合った内容を元に、当日の参加者有志や職員と意見交換。講師の助言を得ながら、次年度の8作品を選定する。（参加者：10人前後）

7

講座が8回ありますが、その後に次年度の課題図書の選定という作業に入っていきます。それは参加者有志、職員、講師で相談して決めています。あらかじめ次年度に取り上げたい本と今年度を振り返っての意見・提言などのアンケートを皆さんからとって、1月下旬に参加者有志と職員とで振り返り会を行っています。このときに課題図書の候補作についても話し合いをしています。これは毎回10人ぐらいの参加者がいます。

本を決める目安として、文庫本であること、長い作品はなるべく避けるということを入れて選んでいます。1カ月ごとにブッククラブがあるので、本があまり長くと読み切れない方もいますし、あと文庫本でないと持ち歩きながら読むことができないので、一応条件として文庫本、短めのことですが、中には長いのもあったりして、一昨年ぐらいは結構長くて、大変なときもありました。

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

【文集づくりについて】

- ◎ 文集は参加者の手作り。（参加は自由）
- ・ 毎年1月に全8作品が終わった後、その年にブッククラブで取り上げた本で印象に残っている作品について、感想文を集める。（1人2作品まで）
- ・ 職員が文集用に体裁を整えた後、書いた人たちが集まり、お互いに読み合わせをして加筆修正後、ページを整えて印刷。



製本作業

8

文集づくりですが、課題図書の選定が終わった後、文集づくりが始まります。文集は参加者の方々との手づくりになります。その年のブッククラブで取り上げた本で、印象に残っている作品について感想文を書いていただきますが、1人2作品までということで集めています。何作品も書きたいという方もいますが、いつか余りにも多くて文集づくりが大変だったときもあって、1人2作品までということでお願いしています。

職員は文集用に体裁を整えた後、書いた人たちが集まってお互いに読み合わせをします。その後、修正をしたりしてページを整えて、印刷は職員がします。その後、製本作業に入ります。

### ③どんな講座だったのか？（内容・展開）

【製本作業の様子】

- ・3月下旬に参加者有志が集まり、製本作業を行う。  
丁合、ホチキスどめ、表紙をつけて→完成！  
(150部作成)



みんなで表紙を貼り付けてます。

今までの文集。力作です！



9

製本作業は、丁合い、ホチキスどめ、表紙をのりづけして完成という形になりますが、これも参加者有志を募りまして、日にちを決めてみんなで一斉に作業をします。この写真にあるとおり、左側のほうは皆さんでのりづけしているところです。右側のほうは、今まで過去4年の文集ですが、文集は当初のころからのものが全部そろっていて、合本にしたり、あとばらばらでも置いています。公民館の図書室にまとめて置いてありますので、興味のある方はご覧いただけますので、よろしくお願ひします。力作が勢ぞろいしています。

### ④どんな成果や学びにつなげられたか？

【「公民館だより」やアンケート、文集のあとがきからの抜粋】

- ・公民館の活動では、自分が関わってきたものではない方が楽しい。自分が好きではない作品、題材に取り組むこと、それを評価する人がいる事を知ること。変わった意見を言う人。公民館活動の基本は、他者を尊重する事だと思う。それは、自分の意見が尊重されることでもあるから。
- ・読まず嫌い自分で手には取らず、やり過ごしていた作家の作品と出会い、本の世界がぐんと広がりました。自分の中でうまく言語化できずモヤモヤとした思いを、まるで代弁するかのように言葉にまとめて話してくれる方が出来るのも魅力。

10

どんな成果や学びにつなげられたかということで、公民館だよりやアンケート、文集の後書きなどからの抜粋を載せさせていただいています。2つ枠の10ページ、11ページに皆さんの感想を載せていますが、こちらに載せているのが一番よくあらわしているかなと思って載せています。

「自分が好きではない作品、題材に取り組むこと、それを評価する人がいる事を知ること。変わった意見を言う人。公民館活動の基本は、他者を尊重することだと思う。それは、自分が尊重されることでもあるから」という言葉のとおり、ブッククラブに限らずどの講座にも言えることだろうなと思ひながら、この感想を読みました。

私自身もいろんな司会をしている中でも、皆さんと同じように皆さんのお話を聞き、あと講師のお話を聞き、文集づくりまで一緒にかかわっているので、参加者の方と同じような思いがこの抜粋の中にあらわれているかなと思っています。

#### ④どんな成果や学びにつながられたか？

【「公民館だより」やアンケート、文集のあとがきからの抜粋】

- ・ 受講したことによって、はじめて読むことになった作家たちだった。本を読むことが大好きでしたが、参加したことにより自分の読書は「単にあらすじ読み」をしていたことに気付いた。多種多様な文学作品を読み、「文学」とはなにかもっと深く作品を通して味わっていきたいと思うようになった。
- ・ 日常の奥にある本当のことを目に見えるように描いてくれるのが文学作品です。そこから感じたことや想像できたことを自由に話せる場が「くにたちブッククラブ」です。職場や近隣などのコミュニティでは、自分を出して話すのは難しいものです。課題の文学作品を読んでいるという一つの土台の上で、言葉にしたことを講師や参加者の皆さんに聞いてもらえる幸せを感じる。

11

この感想のほかにとりか、少し話は違いますが、この講座の参加者有志が大体10月から11月ごろに文学散歩という計画を立ててくれて、今年度扱っている作品に沿ったコースや関連している場所などに行ってみるということをしています。いろいろな発見があったり、おいしいものが食べられたりして、結構おもしろいのですが、これは公民館主催の事業ではなくて、参加者有志の人たちが自主的に計画を立てて、皆さんに参加を募って出かけるということをしています。今年は真鶴のほうに行く計画を立ててくれた方がいて、真鶴に行ってきました。少し遠かったのですが、行ったかいがある、おもしろさでした。こういう人とのつながりというか、参加者同士のつながりも、講座を通して広がるのかなと実感しているところです。

#### ⑤今後の課題や大切にしたいこと

- ◆ 参加者全員が、感想を発表したい人ばかりでなく、発表をパスしながらも参加する人、発表が苦手な人、控え目に話す人もいます。それでも継続して参加しているのは、ひとつの作品について、講師や参加者あるいは参加者同士のやり取りによって、話す・聞く・考えることの面白さや充実感が得られるからではないだろうか。また、参加者同士のつながりも広がっていく。
- ◆ この状況を維持しつつも、もっと幅広い年代に参加してもらえると、違った視点からの感想が出てきて、さらに参加者同士や講師とのやり取りが、面白くなっていくのではないかと考えています。

12

今後の課題や大切にしたいことということで、参加者全員が感想を発表したい人ばかりではなくて、発表をパスしながらも参加する人、あと発表が苦手な人、控え目に話をする人もいます。それでも継続して参加しているのは、1つの作品について参加者や講師の方、あるいは参加者同士のやり取りによって、話す・聞く・考えることのおもしろさや充実感が得られるからではないでしょうか。また、参加者同士のつながりも広がっていくという状況を大切にしていきたいと思っています。

課題の一部ですが、この状況を維持しつつも、もっと幅広い年代にも参加してもらえると、もっと違った視点からの感想や意見が出てきて、さらに参加者同士、講師とのやり取りがおもしろくなっていくのではないかと考えています。



## ⑥みなさんとふりかえって考えたいこと (課題)

毎年30人以上の申込みのうち、継続して参加しているのは20人くらい。その中で20～30代の新しい人は5、6人くらい申し込んでくるが、1作品や講師に興味を持って申し込む場合が多く、継続参加に至らない。



参加する年齢の幅が広いと、さまざまな視点から感想を聞くことが出来て、ほかの参加者にも刺激になり、本に対する理解が深まるのではないかと。また、本を介して参加者同士のつながりや、いろんな学びの相乗効果上がるのではないかと。



せっかくの機会なので継続してほしいが、続けて参加してもらうには、どうすればよいか。

13

みなさんとふりかえって考えたいことです。毎年30人くらいの申込みがあるうち、継続して参加しているのは20人前後になります。その中で、20代、30代の新しい方は5、6人毎年申込みがありますが、講師の方に興味を持って申し込む方が多くて、継続参加に至っていません。参加する年齢の幅が広いと、さまざまな視点から感想を聞くことができ、ほかの参加者にも刺激になり、本に対する理解が深まるのではないかと考えています。また、本を介して参加者同士のつながりや、いろんな学びの相乗効果ももっと上がるのではないかと考えています。

せっかくの機会ですので、継続して参加してほしいのですが、なかなかそこに至っていないのはどういうことか、あるいはどうしていけばよいかということを皆さんと考えていけたらなと思っています。

## 【平成29年度の課題図書】

申込者数		32名
		参加者数
5月	「真鶴」 川上弘美	27名
6月	「恋歌」 朝井まかて	22名
7月	「殺人出産」 村田紗耶香	20名
9月	「沈黙」 遠藤周作	23名
10月	「博士の愛した数式」 小川洋子	23名
11月	「備後道守」 木内昇	21名
12月	「掏摸」 中村文則	20名
1月	「ショート・サーキット」 佐伯一麦	
	(1月18日予定)	

14

14ページ、15ページには、29年度、28年度の課題図書はこういうのを読みましたということで、参加人数と申込者人数を載せていますので、参考に見てください。

## 【平成28年度の課題図書】

申込者数		37名
		参加者数
5月	「さようなら、オレンジ」 岩城けい	29名
6月	「明暗」 夏目漱石	23名
7月	「真途めぐり」 鹿嶋田真希	21名
9月	「近代能楽集」 三島由紀夫	20名
10月	「鹽壺の匙」 車谷長吉	23名
11月	「密のあわれ」 室生犀星	16名
12月	「アメリカひじき」 野坂昭如	19名
1月	「大人のための残酷童話」 倉橋由美子	22名

15

# ふれあいひろば (世代間交流事業)

<テーブルB>

担当：平尾 久美子

## ①公民館事業の中の位置付け

### ②共生の地域社会を育む

女性のライフデザイン、母と娘のむずかしさ、男性の料理教室、親子で遊ぼう考えよう、『世代間交流』、中高生のための学習支援、青年室活動、青年室活動、シルバー学習室、ワークライフバランス、老いとケア、しょうがいしゃ青年教室、しょうがいしゃパソコン教室、バラスポーツ、生活のための日本語講座、日本語教育入門、にほんごサロン など

2

まず最初に、公民館事業の中での位置付けですが、5つの柱のうち、女性や高齢者、青年やしょうがい者、外国人といったさまざまの方との「共生の地域社会を育む」ところに位置付けされている事業です。

## ②なぜ、この講座をおこなったのか？(目的・経緯)

企画前までに主に携わっていた講座

- シルバー学習室
- くにたち市民文化祭

比較的、シニア世代の方が多い

➤教えられること(引継いでいくこと)をたくさんもっている!

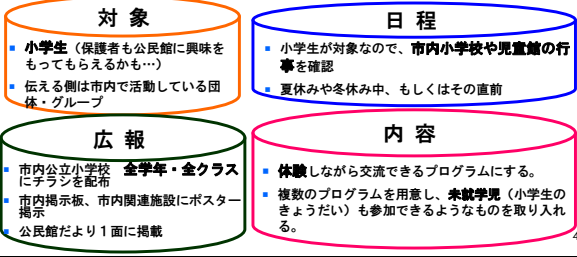
「伝える」・「交流する」  
仕組みを考えたい

もったいない!

3

この講座を企画した目的・経緯ですが、この講座を企画する前まで、シルバー学習室やくにたち市民文化祭等、失礼ながら比較的高齢の方々と接する機会が多い講座を担当していました。そうした中でよく聞かれたのは、もう年ですからですか、もうそろそろ引退ですからね、というような言葉だったのですが、この世代の方は大変多才で、教えられること、引き継いでいくことをたくさん持っていらっしやいました。そうした中で、それはもったいないと思い、何とか伝えたり、交流したりする仕組みを考えていきたいと思ったことが、きっかけです。

②なぜ、この講座をおこなったのか？（目的・経緯）  
～講座を企画するにあたって～



対象ですが、小学生としました。理由は、保護者も公民館に興味を持ってもらえるのではないかなと思ったからです。伝える側ですが、それは市内で活動している団体やグループの方にお問い合わせしようと考えました。

日程ですが、小学生が対象になるので、市内の小学校や児童館の行事を確認して、夏休みや冬休み中、もしくはその直前あたりに設定すると決めました。

できるだけたくさん子どもたちに来てもらいたいと思い、広報については市内の公立小学校の全学年・全クラスにチラシを配布しました。また、市内の掲示板や関連施設にポスターを貼ったり、2年目からは公民館だよりの1面で呼びかけるような工夫をしました。

肝心な内容ですが、一方的に子どもたちが話を聞くというのではなくて、体験しながら交流できるプログラムにすることを一番に考えました。また、複数のプログラムを用意して、未就学児、小学生の子どもたちの兄弟も参加できるようにものを取り入れようと思いました。

③どんな講座だったのか？（内容・展開）  
～実施内容（チラシ参照）～

年/月/日/時	講座内容	協力団体・グループ	参加人数 (子ども数)
H26/8/3 (日) 10時～ 16時	夏休みふれあいひろば わらで織とびをつくらう！/イルカの輪くくり工作/お茶をたててみよう！/ゆかたを着てみよう！/みっちゃんのおはなし会/ペイントしてみよう！/ヘルマンハープをひこう！	くじらたちの暮らしを記録する会/がまどんさるどん/地域国際交流まほろのらっぴ/国立国際交流会/トールペイントの会/アンサンブルりんのね/くじらまちまち重宝士堂各人関連種 キーステーション/公利運	82名
H27/12/1 (土) 10時～ 15時	冬休み重宝ふれあいひろば にーだんごをつくらう！/ミニクリスマスツリー工作/ニュースをまわめよう！/紙面で年賀状をつくらう！/昔のあそびをしよう！/くじらまちをしよう！/ロシアンダンスを教おう！	国立市体育協会/国立市ボランティアセンター/公民館だより編集委員会/おれする/マリンワークの会/くじらまちの暮らしを記録する会/まめっちょ/公利運	70名
H27/12/1 (土) 10時～ 15時	冬休み重宝ふれあいひろば 和菓子をつくらう！/オリジナルストラップをつくらう！/クリスマスカードをつくらう！/昔のあそびをしよう！/ボリッシュ防炎食をつくらう！/消防団のやりわりを知らう！/ケガの手当てを知らう！/ヘルマンハープをひこう！	大学通り商店会/国立市消防第三分団/国立市十字車団/くじらまち地域外国人のための防災連絡会 (KUMISO) /心連会/国立市体育協会/まめっちょ/アンサンブルりんのね/公利運	105名
H27/7/16 (土) 10時～ 15時	夏休み重宝ふれあいひろば おなか完食教室&ヤクルト容器工作/プレスレットヤスト ラップをつくらう！/オリジナル水ようかんをつくらう！/ピロ/とろりネットに合わせた講義しよう！/クワッパズルをつくらう！/子ども自転車免許証をもらおう！	ヤクルトマン/くじらまちづくり/自転車倶楽部/Daika-ha [ちかば] /心連会/まめっちょ/公利運	99名

年に1回開催して、これまでに全4回開催しました。子どもたちだけの人数で、100名程度が毎回参加してくれています。



複数のプログラムを用意するとはしましたが、それらをできるだけ多く体験してもらうために、スタンプラリー形式にしました。こうしたスタンプラリーのカードを首から子どもたちにかけてもらって、1つのところを体験するごとに中にスタンプを押してきてもらうというやり方で、次々に回ってもらえるような工夫をしました。

受付は、日ごろ公民館がお世話になっている公民館利用者連絡会の方々をお願いして、例えば縄を編んで縄跳びをつくったり、茶道体験、みんなでお茶の点て方を教わったりすることをしました。未就学児の子には昔遊びや、お話会などがとても人気でした。また、赤十字奉仕団の方や消防団の方にもご協力いただき、少し学習的な要素も取り入れました。

また、公民館だよりでお世話になっている編集研究委員の方にもご協力をいただいて、この日の1日をカメラを持ってみんなで回ってもらって、自分だけの新聞をつくることも体験してもらいました。1日でできるだけ体験してもらうということで、防災食をみんなで作って少し食べてもらって、おなかを満たしながら、いろいろ回れるような工夫もしました。

いつもこの事業の最後は音楽的なものを取り入れて、みんなで歌を歌ったり楽器を弾いたりしながら、楽しんでいってもらうという行程です。

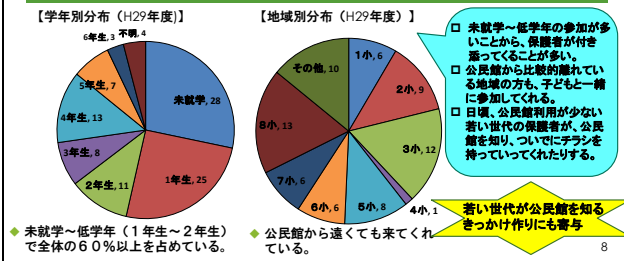


これまでに過去4回やってきていますが、一番最初は夏休みに行いました。翌年は、夏休みは公民館が工事中になるということで冬休みに実施して、少し人数が減ったため、冬は駄目かと思いながらももういっぺん実施してみたら、100名超えの大人気で、たくさん集まりました。今年の冬はロビーの工事があったために、今年度は夏に開催しました。

引き継いで教えて伝えていってくれる人たちも、公民館を中心に活動されているグループのほかにも市内関連部署、例えばボランティアセンターに「くにたちカルタ」を教えてもらったり、体育

協会に昔遊びのご協力をいただいたりといったように、少しずつ広げてきました。これまでの全4回で協力いただいた団体は31団体になります。本日いらっしゃっている方の中にも次年度以降ご協力いただける団体・グループの方がいらっしゃいましたら、ぜひお声がけいただければと思います。

#### ④ どんな成果や学びがあったのか？ ～参加者分析～



この事業における学びなのですが、まずは参加者の方から分析をしてみました。こちらにありますように、参加者の60%以上が未就学児もしくは小学校低学年であることがわかります。また、地域的に見ると、公民館に来るに当たって、甲州街道を越えたりとか線路を渡ってこななければいけないという、少し遠い学校からも結構ご参加いただいていることがわかります。

受付にいても感じたことですが、保護者と一緒に来る子どもたちが近年特に多くなっています。そういった子どもたちを介して保護者の世代が、比較的公民館の利用が少ない若い世代ではあるけれど、公民館を知って、ついでに講座のチラシを持っていくてくれたりというところもよく見かけ、若い世代が公民館を知るきっかけづくりにも寄与できているかと思えます。

#### ④ どんな成果や学びがあったのか？ ～交流面～

##### <参加者の声から>

- 昔のお話ありがとうございました。また、お話を聞きたいです (小5)
- いろいろなことをおしえてくれてありがとうございました (小1)
- 公民館に初めて来ました。
- 1日中、公民館で過ごしました。遊びながらも防災食や消防の話など勉強になることもあって、子どもたちと一緒に親も楽しめました。
- 「ヘルマンハーブ」という楽器を初めて知りました。普段は学校で弾くことがない楽器を子どもが演奏体験できて良かった。
- 日頃、参加している「まめっちょ」に聞いて参加した。他にもいろいろ参加できて楽しかった。

交流面から見ると、子どもたちからの声ですが、「また、お話を聞かせてください」とか、「いろいろありがとうございました」といった声があって、保護者の方からは、「公民館に初めて来ました」とか、「学びながら1日公民館で過ごして楽しかったです」、あと「学校で教えてもらえないようなことが教えてもらったのがよかったです」というような話が多くありました。

#### ④どんな成果や学びがあったのか？ ～交流面～

<協力団体・グループの声から>

- 子どもたちは初めてのことで興味津々で、いっぱい質問しながら一生懸命やってくれて元気もらった。
- 手伝ってもらうのではなく、自分でやる子が多く、説明のしがいがあった。
- 日頃の活動も知ってもらえて、参加いただくようになった。

双方に発見があった！

10

協力いただいた団体・グループの方からは、「子どもたちは初めてのことなので興味津々で、いっぱい質問しながら一生懸命やってくれたのを見て元気をもらっちゃいましたよ」という話とか、最近の子の傾向ですが、「手伝ってもらうのは皆さん嫌で、自分でやるという子が多くて説明のしがいがあった」という話、また「この事業をきっかけに、日ごろやっている活動にも来てくれるようになったんですよ」という声もあって、参加する側、また協力団体側、双方に発見があったと思っています。

#### ⑤今後の課題や大切にしたいこと

世代を超えた交流は、今後も大切にしていきたい。

公民館は、おとな・青年・子ども・外国人・しょうがいしゃといろいろな人が集まる場所だからこそ、知り合う・出会う機会やきっかけ作りができる場所。

多種多様なしくみが必要

11

こうした世代を超えた交流は今後も大切にしていきたいと考えています。というのは、公民館というところは大人や青年、子ども、外国人、しょうがい者といろいろな人が集まる場所です。だからこそ、知り合うきっかけや出会う機会がある場所だと思っています。そのため、もっと多種多様な仕組みがあったらいいのではないかと考えています。

#### ⑥みなさんとふりかえって考えたいこと

- 世代間、グループ間が交流するのに他の方法はあるか？
- 子どもから大人へ伝える・教えることもあるか？（中・高校生がシニア世代へスマートフォンの使い方など）

12

そこで、この後、みなさんとふりかえって考えたいことです。世代だけに限らず、日ごろ皆さんが活動されているグループでも構わないのですが、そうしたグループ間が交流するのに何かほかにもいい方法があるかどうかということと一緒に考えたいというのと、今どちらかという大人から子どもへということでしたが、子どもから大人へ伝えてほしいこと、例えば中高生がシニア世代にスマホの使い方やパソコンの使い方を教えてくれる、そのような逆バージョンのこともリクエストがあれば、ぜひ一緒に考えていきたいと思っています。

<p style="text-align: center;">2018年1月7日(日) みんなで話そう公民館講座—市民と職員で「学び」をふりかえる会—</p> <h2 style="text-align: center;">認知症とともに生きる —認知症映画会の取り組み—</h2> <p style="text-align: center;">&lt;テーブルC&gt;</p> <p style="text-align: right;">担当：井口啓太郎</p>	
<p>①公民館事業全体の中の位置づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「公民館事業5つの柱」では、②共生の地域社会を育む→「老いとケア」という講座枠の位置づけ。</li> <li>超高齢社会の社会問題・地域課題を考えるために、この講座枠がスタート。高齢者自身の学習、地域参加を促す別の講座として、「シルバー学習室」、「マイノート(自分史づくり)」などがある。</li> </ul> <p>⇒この講座枠では、「認知症」をテーマに取り上げ、病を理解する学び、当事者・介護者を支えていく地域づくりを目指す。</p>	<p>公民館事業全体の中での位置づけです。5つの柱の中では、②の共生の地域社会を育むというところに「老いとケア」という講座枠があって、その位置づけの中で実施をしています。このテーマでは、超高齢社会の社会問題・地域課題を考えるために、この講座枠がスタートしていて、高齢者自身の学習、地域参加を促すような別の講座としては「シルバー学習室」、あるいは「マイノート」などがあります。この講座枠では、今、社会問題にもなっている「認知症」をテーマに取り上げ、病を理解する学び、あるいは当事者・介護者を支えていく地域づくりを目指していくということでスタートしています。</p>
<p>②なぜ、この講座を行ったのか？(目的・経緯)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2010(H22)年度以前は、関連して「老いを生きる」というテーマの講座枠があったが、継続してお願いしていた講師の都合で終了。</li> <li>「高齢社会を考える」の講座枠は、2012(H24)年度からスタート。2012-2014(H24-26)年度は(2013年2月～2016年2月)は、連続講座「高齢社会を支える地域の絆づくり」(全15回)を実施。この講座から自主グループ「絆の会」が活動を開始。</li> </ul> <p>⇒2016(H28)年3月「認知症」をテーマに取り上げた映画上映会を行う。今回は2017(H29)年度10月まで、全4回の取り組みをふりかえる。</p>	<p>なぜこの講座が始まったのかという目的や経緯です。2010年度以前は、この事業に関連して「老いを生きる」というテーマの講座枠がありました。ただ、継続してお願いしていた講師の都合で、2010年に終了してしまいました。</p> <p>「高齢社会を考える」という講座枠は、1年空いて、2012年度からスタートして、そこから3年は、連続講座「高齢社会を支える地域の絆づくり」という全15回にわたる事業を実施して、この講座から自主グループが生まれました。</p> <p>少しまた角度を変えて新しい取り組みをとという中で、2016年3月に認知症をテーマに取り上げた映画上映会を行うということがスタートして、今回はこれまで全4回の取り組みをやってきたので、その4回を振り返ろうと思います。</p>

### ③どんな講座だったのか？(内容・展開)

- ・ 第1回 2016 (H28) 年3月18日 (金) 参加者93名  
『妻の病—レビー小体型認知症』上映とトークセッション
- ・ 第2回 2016 (H28) 年7月7日 (木) 参加者120名 (交流会参加者47名)  
『徘徊—ママリン87歳の夏』上映と感想を出し合う交流会
- ・ 第3回 2017 (H29) 年1月20日 (金) 参加者108名 / 27日 (金) 参加者40名  
『毎日がアルツハイマー1・2』上映 / 「介護体験を聴く・語る会」
- ・ 第4回 2017 (H29) 年10月12日 (木) 参加者55名 (語る会参加者35名)  
『田辺鶴瑛の介護講談』上映と「介護体験を語る会」

全4回で、参加者は映画会ということもあって、非常に多くなっています。1回目が93名、2回目が120名、3回目は2回に分けて行いましたが、1回目が108名、話し合う交流会は40名が参加してくれました。昨年の10月に行ったものは少し参加者が減って、55名ということになりました。

### 第1回 『妻の病— レビー小体型 認知症』上映と トークセッション

※後半のトークセッション

伊勢真一  
(『妻の病』映画監督)  
× 井口高志  
(奈良女子大学・社会学者)

- ・ 多数の参加、認知症への関心の高さを実感。
- ・ しかし、参加者から「後半のトークセッションだけではもったいない」「介護について話したかった」などの声。



対談する映画監督と社会学者

第1回目は私が企画をして、『妻の病』という映画を調べて企画したという経緯になります。この映画は、実際にご家族が認知症になってしまう。そのときに夫がどんなふうにも苦悩したかということが描かれていくような映画になっていて、ある意味で認知症というのはだれでもなり得るものですし、当然家族になる可能性もあるということもあって、関心が非常に高く、100名近い方がご参加いただきました。その映画を観た後に、写真にあるようなトークセッションとして、実際にこの映画の監督をされた伊勢さんと、認知症、介護の問題を研究されている方に登壇いただいて、終わった後にお話を1時間程度伺いました。ただ、参加者からは逆に、後半のトークセッションだけではもったいないんじゃないかというお声とか、あるいはもっと介護について自分自身のこと、あるいは家族のことをもっと話したかったという声をいただきました。



第2回  
『徘徊—ママリン  
87歳の夏』上映  
と感想を出し合  
う交流会



7～8人での議論・交流

・ 前回の声を踏まえ、声を伝えてくれた方や以前の講座参加者に声をかけて、後半のグループでの話し合い・交流に協力してもらう。事前に試写会と運営方法について話し合う機会を設ける。

・ 話し合いに参加した方は、介護中や介護経験者が多く、映画の感想だけではなく、介護の悩みや経験などが語られ、交流が深まった。アンケートには、「自分の介護経験を話したい」と書かれた方もいた。



発表する参加者

2回目は、前回そういった声が出たことも踏まえて、実際にそういった声を私に伝えてくださった参加者の方や、あるいは以前の講座参加者の方に声をかけて、映画を見た後に実際に映画の感想を話し合ったり、交流するような時間を設けました。2回目に『徘徊—ママリン87歳の夏』という映画を上映しました。その映画を見た後に、七、八人ぐらい、今日のようにグループに分かれて交流するというを行いました。

右の写真のように、実際にどんな話し合いが行われたかというのも、参加者の方に発表していただきました。話し合いに参加した人は介護中や介護経験者が多く、映画の感想だけではなく、実際に介護の悩み、あるいは経験などを語られて、交流が高まりました。

また、アンケートには、自分の長かった介護経験をぜひ皆さんに伝えたいと書いてくださった方もいました。

第3回『毎日が  
アルツハイマー  
1・2』上映  
／「介護体験を  
聞く・語る会」



企画した10名の実行委員



3名の介護体験を聴く時間



介護を語り合う時間

・ 第2回を実施後、ふりかえる会を実施、結成された実行委員会が中心になって第3回上映会を実施。

・ 上映会と別日程で、3名の介護経験者の話を聴き、グループで語りあう「介護体験を聞く・語る会」を実行委員会と公民館が共同実施。40名参加。

3回目です。3回目は、2回目に運営の協力をしてくださった方々が10名ほどいまして、その人たちが実行委員会をつくって、その実行委員会が映画会を主催するという形で行われました。公民館としては、その映画会を共催で実施する中で、日を分けて「介護体験を聞く・語る会」を別に設けました。

2回目のアンケートでは、実際に自分の介護経験を話して伝えたいと書いてくださった方などに、具体的にどんな介護経験をされてこられたのかということ、映画を観た1週間後に40名の方が集まって、「介護体験を聞く・語る会」を開催しました。スクリーンに写している写真は、一番左が企画してくださった10名の実行委員の皆さんで、3名の方の介護体験を聞く時間を設けました。その後、またグループになって語り合うというプログラムで実施してきています。

第4回  
『田辺鶴瑛の  
介護講談』上映  
と「介護体験を  
語る会」

- ・ 映画参加者は必ずしも多くないが、終了後の「介護体験を語る会」は、いつも通りの参加者数だった。
- ・ 話し合いの内容は、認知症の服薬、介護施設のサービスのあり方など、具体化しつつあり、より専門的な学習のニーズが出される。



介護する男性たちが語る



介護施設に関する議論も



いつも足りなくなる時間

4回目は『田辺鶴瑛の介護講談』という映画を実施しています。このときは、映画の参加者自体は必ずしも多くはありませんでしたが、終了後の「介護体験を語る会」にはいつもどおり非常に多くの参加者がありました。これも実行委員会と一緒に運営をさせていただきましたが、話し合いの内容はより具体的になって、例えば認知症のときの服薬をどうしているかですとか、実際にグループホームですとか、介護施設のサービスのあり方はどうあるべきなのかといった形で、非常に具体的な専門的な学習のニーズが出されてきたかと思っています。

④どんな成果や学びにつなげられたか？

- ・ 映画が認知症をめぐる認識や介護観を見直すきっかけになった。
- ・ 参加者の感想から「アルツハイマーは脳の95%が正常、残りの5%にこだわらないで、明るく楽しく付きあうことで普通に生活できるということ。介護する側・される側の関係が大事だと思いました」「パーソナルセンタードケアという考え方は、認知症であるかにかかわらず、人との関わりで人間として最も必要なものと思います」
- ・ 実行委員会の議論を経て、第3回から「認知症とともに生きる」を共通テーマに設定した。

どんな成果や学びにつなげられたかということにつきまして、少しまとめます。1つ大きな点としては、映画が認知症をめぐる認識や、介護観というものを見直すきっかけになったのではないかと思います。

2つほど感想をご紹介させていただきたいと思います。「アルツハイマーは脳の95%が正常で、残りの5%が問題を抱えてしまう病なんだということが映画の中でご紹介されたりしましたが、そういった中で5%にこだわらないで、明るく楽しくつき合うことで普通に生活できるということ。介護する側・される側の関係性が非常に大事なんだと思いました」という感想。あるいはその映画の中で提起されていたパーソナルセンタードケアという考え方があったのですが、「この考え方は認知症であるかどうかにかかわらず、人との関わりで人間として最も必要なものだというふうに認識した」という話などもありました。

そういったことがあって、実行委員会の議論の中で、第3回目から「認知症とともに生きる」という共通テーマを設定するという経緯になりました。

#### ⑤今後の課題、大切にしたいこと

- ・「認知症」という重たいテーマであっても、映画はとっつきやすく、考えるきっかけづくりに適している。一方、映画だけでは「認知症」について、課題の解決や理解を深めることにはなりにくい。
- ・社会資源とのつながりや、テーマ別の深い学習機会を盛り込んでいく必要がある。
- ・介護者中心の話題になりがちで、当事者の視点が弱い。
- ・市民の実行委員会とともに市民目線の講座づくりを目指す。

今後の課題、大切にしたいことですが、「認知症」という重たいテーマであっても、映画というメディアを使うと非常にとっつきやすく、考えるきっかけづくりになったと思っています。ただ、一方、映画だけでは、「認知症」についてのそれぞれが抱えている課題の解決や理解を深めていくことにはどうしてもなりにくいと思っています。

そういう意味では実際に家族会の取り組みや、市の地域包括支援センターなどが行っている取り組み、そういった社会資源とのつながり、あるいはテーマ別に深い学習機会をつくっていくことも必要なのかと思っています。

それから、どうしても映画を観る方は介護者中心の話題になりがちで、認知症当事者の視点が弱くなるという課題も出てきたかと思います。そういった課題を今後乗り越えていくために、今は具体的に講師を呼んだ講座などが必要なのではないかという議論もしているところです。そういった議論も市民の実行委員会とともに、市民の目線で講座づくりができていければいいかと思っています。

#### ⑥みなさんとふりかえって考えたいこと(課題)

- ・職員が一人で考えて講座を企画するだけでなく、さまざまな市民の「声」を聴きながら企画していく講座づくりのあり方。
- ・たくさんの参加者を得ることができる映画上映等の取り組み(主に公民館)と、ひとり一人の悩みを聴きあい、課題解決につなげていく取り組み(主に市民の活動)、それぞれをつなげていくやり方。

みなさんと一緒にふりかえって考えたいこととして、職員が最初は1人で考えて企画したわけですが、それだけではなくて、さまざまな市民の声、市民のニーズに耳を傾けながらじっくり企画していく講座づくりが必要なテーマかと思っています。このやり方について、ぜひ皆さんと一緒に議論ができればと思っています。

2つ目は、たくさんの参加者を得ることができる映画上映の取り組み、これは映画上映にも予算が必要なので、公民館がこういった事業に取り組んでいくことは必要かと思っています。

一方で、一人一人の悩みを聞き合いながら課題解決につなげていくというのは、どうしても公民館だけでは限界があるという中で、むしろ市民の主体的な活動の中でそういったものが今行われているところだと思います。それぞれをつなげていくようなやり方、取り組み方として、どんなアプローチができるかということも皆さんと一緒に考えたいと思っています。

「文教都市くにたち」市制施行50周年記念  
**希望の社会をつくる“知”と“学び”**  
—国立市出身の一橋大学長・京都大学総長から次代へのメッセージ—

お話 蓼沼宏—(一橋大学長・経済学) × 山極壽—(京都大学総長・人類学)

〈テーブルD〉

担当:高下由合

1

①公民館事業の中の位置づけ

③まちを知る、地域から学ぶ

自然、緑化活動、地域史、一橋大学院生講座、一橋大学連携講座、  
学びのデザイン、社会教育学習会、公民館利用者連絡会、地域防災、  
**市制施行50周年記念事業**など

2

この事業は、昨年(2017年)の10月22日に芸小ホールで実施しました。一橋大学の学長、蓼沼宏一さんと京都大学の総長、山極壽一さんの講演会のものです。国立市は昨年、2017年1月1日に市制施行50周年を迎え、国立の市報でも幾つか載っていたかと思いますが、国立市ではさまざまな事業が50周年を記念して行なわれました。その中の一つとして公民館主催で実施した事業になります。

公民館事業としての全体の中での位置づけは、3番の「まちを知る、地域から学ぶ」という枠の中に入っています。

②-1 なぜこの講座を行ったのか？  
(目的・経緯)

市制施行50周年をむかえるにあたり、50周年記念事業の職員提案の募集がかかる

〈国立市市制施行50周年記念事業の基本方針〉

- ・学び挑戦し続けるまちにするために
- ・ともに歩み続けるまちにするために
- ・培い育み続けるまちにするために

3

なぜこの講座を行なったのかという目的ですが、主に3つのポイントがありました。まず1つ目、一昨年、市制施行50周年を迎えるに当たり、50周年記念事業の職員提案というのが市役所の中で募集がかかりました。その中の基本方針として、前に出してあります3つが掲げられました。「学び挑戦し続けるまちにするために」「ともに歩み続けるまちづくりのために」「培い育み続けるまちづくりのために」というものでした。

②-2 なぜこの講座を行ったのか？  
(目的・経緯)

公民館に6年間勤めるなかで・・・

「公民館でさまざまな講師の方にお会いすると、生き方はいろいろあっていいし、カッコいい大人はたくさんいるんだな.....と感じます。将来への不安や現状への不満、毎日何かと葛藤していた昔の自分に教えてあげたいと思ったりもします」

(「公民館だより」2017年5月号、〈公民館の窓〉より)

4

ポイントの2つ目ですが、これまで6年間勤めてきてさまざまな講座を担当しました。公民館でいろんな講師の方々にお会いすると、生き方はいろいろあっていいし、カッコいい大人はたくさんいるなど常々実感してきました。皆さん講師の方は本当に楽しそうに、たぶん会場の中にいる、だれよりもこの分野の話は本人が好きなんだろうなというふうに生き生きお話しされている姿を6年間見てきたので、ぜひそういったすてきな大人と若い世代が知り合うきっかけがあればいいなと考えました。若い世代の人、高校生や大学生になると、どうしても将来への不安とか、いろいろな壁にぶち当たる時期だと思うので、そういった若い世代にいろいろな大人がいるよ、いろいろな生き方があるよというのを知ってもらえる機会があるといいなと思ったりもしていました。

②-3 なぜこの講座を行ったのか？  
(目的・経緯)

他課の職員との雑談のなかで・・・

一橋大学の蓼沼学長も国立市ご出身であることを知る  
→市制50周年の年に、国立大学の長が2人も国立市出身  
というのは偶然ではなく必然？！

5

最後、ポイントの3つ目ですが、京都大学の山極総長は、以前、公民館の「図書室のつどい」でお話いただいたことがあったので、もともと国立市のご出身というのは知っていました。ただ、ほかの部署の職員の方との雑談の中で、今の一橋大学の学長も国立の出身であるということを知って、市制50周年の年に、国立大学の長が2人も国立市出身というのは、これは対談をやるしかないだろうということで企画しました。

### ③-1 どんな講座だったのか(内容・展開)

・申込者数—389名  
〈一般枠〉市内からの申込 326名／市外からの申込 27名  
〈青年枠〉36名(年齢:9～21歳)

・当日参加者数—324名  
※当日は荒天のため参加者数減



6

どんな講座だったのかというところですが、まずお申し込みいただいた方は全部で389名の方々でした。市外からの申し込みも27名ありましたが、芸小ホールの座席の数の関係上、大変残念ですが、市外からのお申し込みの方々はお断りをさせていただいたという状況になっています。

また、青年枠ということで36名お申し込みいただいたのですが、この青年枠というのを今回設けたのは、50周年記念ということで、これまでの50年を振り返るだけではなく、これからの50年に向けて若い世代にも来てもらいたい、また、先ほど申したような思いもあったので、若者に向けた企画にしようということで青年枠というのをあえて設けました。この青年枠の方々には、市内にお住まいの方、もしくは市内の学校に通っている方々になります。

ただ、当日、非常に大雨になり、ご参加いただいたのは実際324名ということで、申し込み人数からは大分減った状況になりました。

### ③-2 どんな講座だったのか(内容・展開)

お話・対談の内容(詳細は「公民館だより」1月号)

- ・蓼沼学長のミニレクチャー「経済学のエッセンス」
- ・山極総長のミニレクチャー「ゴリラに学ぶ人間の本質」
- ・お二人による対談「くにたちのまちの魅力」
- ・若者からの質問



7

当日の講演会自体は2時間という本当に短い時間だったのですが、蓼沼学長と山極総長それぞれのミニレクチャー、15分ずつぐらいのものですが、こちらをお話しいただいて、その後はお二人による対談をしていただきました。

#### ④-1 どんな成果や学びがあったのか？

〈若者からの質問〉

- ・夢を叶えるためにどのような行動をし、どのように努力をされましたか？
- ・海外の研究生生活の中で、一番苦労したことは何ですか？
- ・人間社会の本質を示唆してくれるような本があれば、先生たちの専門分野からそれぞれ教えてください。
- ・これからの50年を担っていく若者に、期待することは何ですか？

8

講演会の最後、若者からの質問ということで、先ほどの36名の青年卒に応募いただいた方々に事前に質問を募集しました。そこで集まってきた質問を一部抜粋したのですが、「夢を叶えるためにどのような行動をし、どのように努力をされましたか？」、「海外の研究生生活の中で、一番苦労したことは何ですか？」、「これからの50年を担っていく若者に期待することは何ですか？」という非常に素朴な若者らしい質問をいただきました。当日は、舞台上にいる2人の学長に、それぞれ若者の代表に直接マイクを渡して質問してもらって、やりとりをするということをしました。

#### ④-2 どんな成果や学びがあったのか？

〈参加者の感想から〉

- ・学び続けるとは楽しいものであると改めて感じられたお話で大変有意義でした。
- ・ここ数年の市の活動・企画・市民の為に今までにない取り組み素敵な企画、感謝しています。今回は息子(高校生)と参加しました。多くの子ども達にもっともっと参加して欲しかったです。
- ・今後もこのような若者層向けの企画を周知したり機会を増やしてもらえると良いです。

9

参加者の感想を一部抜粋したのですが、「学び続けるとは楽しいものであると改めて感じられたお話で大変有意義でした」や、「今回は息子(高校生)と参加しました。多くの子ども達にもっともっと参加して欲しかったです」。あとは「今後もこのような若者層向けの企画を周知したり、機会を増やしてもらえると良いです」という感想をいただき、皆さん非常に有意義でしたという声が多かったです。

#### ⑤-1 今後の課題や大切にしたいこと

参加者の感想から

「...若い世代を意識した企画であれば、もっと若者に生きてゆくうえでの学問の楽しさや、未知の分野に飛び出していく覚悟と心構えなど、現代社会のあり方の課題、その他、切り口はたくさんあったのではないのでしょうか...」

10

ただ、その感想はとても的を射ているなど後で反省したのですが、「若い世代を意識した企画であれば、もっと若者に生きてゆくうえでの学問の楽しさや、未知の分野に飛び出していく覚悟と心構えなど、現代社会のあり方の課題、その他、切り口はたくさんあったのではないのでしょうか」という感想をいただきました。実際、2時間の中でそれぞれのミニレクチャーと、あとは50年の国立の歩みなどを振り返っていたので、どうしても未来に向けたメッセージや、将来に向かった思いを語っていただく時間が短くなってしまったので、こういった感想があったのかと思います。

### ⑤-2 今後の課題や大切にしたいこと

・公民館では著名な方をお呼びした講演会をこれまでも多く実施してきた。

↓

しかし参加者の年齢層は比較的高めである。実際、内容は大学生以下の若者には難しいものであることが多い。

・青年室事業など、若者向けの事業も展開してきたが、若者に向けた情報発信、講演会はあまり実施されてこなかった。

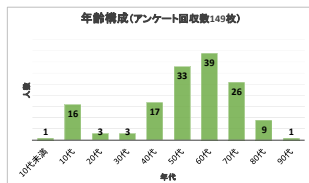
11

今後の課題としては、公民館ではこれまでも著名な方をお呼びした講演会、ここのホールがいっぱいになるような講演会を多く実施してきました。しかし、参加者の年齢層が比較的高めかなと思います。実際、山極総長に以前お越しいただいたときも、小学生か中学生の女の子が来てくださったんですが、お話の途中で退席されるということもあって、内容自体が大学生以下の方には少し難しいかという印象も持っています。公民館としては青年室事業や、若者向けの事業もこれまで展開してきてはいますが、若者に向けた講演会というのはあまり実施してこなかったかと思っています。

### ⑥みなさんとふりかえって考えたいこと

1) 若い世代は、このような講演会の機会を求めているか。

2) 若い世代に学問のおもしろさを伝えるためには、どのような事業が考えられるか。



12

みなさんと一緒にふりかえって考えたいこととして、そもそも若い世代はこのような講演会の機会を求めているのかどうか、もしくは公民館という学校教育の場ではない場所で若い世代に学問のおもしろさを伝えるためには、ほかにどういった事業が考えられるかというのを一緒に考えたいと思います。

最後に、載せている年齢構成については、このイベントのアンケートが149枚回収できたのですが、そのアンケートを書いていた方の年齢構成になっています。やはり50代、60代、70代の方が多い印象ではあります。全体の中で若い世代は36名の青年枠。こういったことを皆さんと考えられればと思っております。